

古墳の代表選手・前方後円墳

前方後円墳を造る6つの「パーツ」を読む

このとき連帯する各地域が同盟をあらわすシンボルとして造り出したのが、前方後円墳を代表とする「古墳」です。古墳は弥生時代の墓とはかなり違い、全国どの地域でも同じような形をしています。前方後円墳を考へるうえで知っておきたいことは、この墓は大きな権力を示すための「パーツ」を集めて造ったパズルのようなもので、権力者にとっての記念碑的な性格が強いということです。

この「パーツ」は、(1)前方後円という鍵穴のような形、(2)古墳の上に立てて並べた土管のような焼き物「埴輪」、(3)古墳の表面をおおう「葺石」、(4)亡き主人を葬る巨大な石の部屋「竪穴式石室」、(5)長い長い丸太のヒツギ「割竹形木棺」、(6)ヒツギの中に納められた権威の象徴の鏡、(7)弥生時代の貝輪をリーツにもつ「石製腕飾り」、(8)生活に必要な道具「鉄製農具」、(9)王者の身体を飾った勾玉などの玉類、(10)武力を示す刀剣や甲冑などの武器などです。

古墳のパーツ...その1 石室

弥生時代の有力者のお墓は、木の棺をそのまま埋めるが多かったのですが、古墳時代前期の有力者の古墳には、棺を納めるための石の部屋である「竪穴式石室」が造られます。島根県では安来市の大成古墳や造山1号・3号墳と塩津山1号墳、大原郡加茂町の神原神社古墳などに典型的なものがあり、全国的に見ても竪穴式石室がまとまって分布しています。竪穴式石室を造ることを許されなかった有力者たちは、木の棺のまわりをきれいな粘土でおおった「粘土棚」という施設を造りました。



「王」の棺はここに納められる



石で造られた王の墓室 (造山1号墳：安来市荒島町)

古墳のパーツ...その2 腕飾り

弥生時代には、九州南部や南西諸島で獲れた貝を使って腕飾りを作ることがはまりました。古墳時代になると腕飾りは、王だけが持つことを許される権威の象徴として、石川・福井県で産出する「緑色凝灰岩」や「碧玉」と呼ばれる石を使って作られるようになります。これらの腕飾り類は島根県でも生産された可能性がありますが、現在県内では、八束郡鹿島町にある奥才古墳群で1点見つかったりしています。



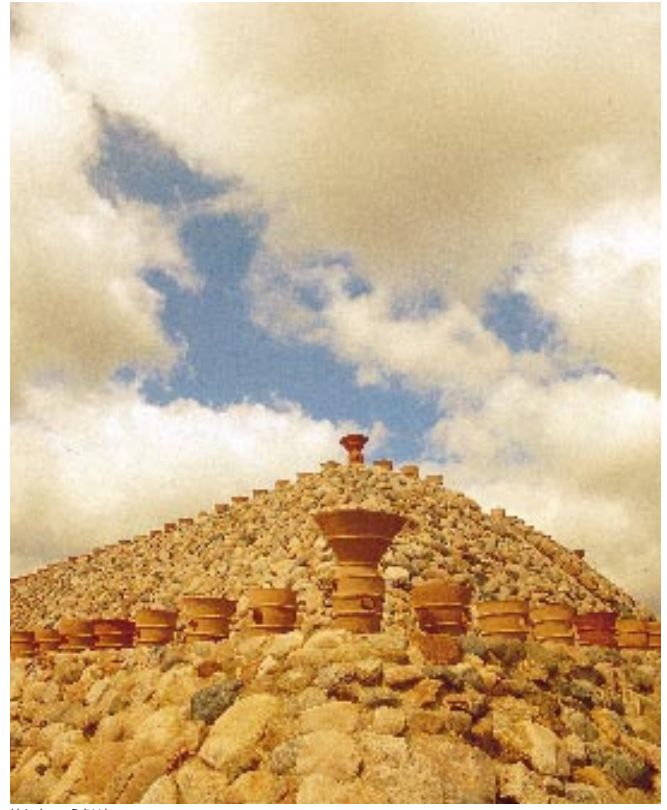
(茶臼塚古墳出土：大阪府柏原市) 写真提供：柏原市立歴史資料館

古墳のパーツ...その3 埴輪

一見すると土管のような焼き物である埴輪ですが、そのルーツは弥生時代後期の岡山県にあると考えられています。もとは有力者の墓を祀る道具として使われたもので、酒(?)を入れた壺を置くための「台」でした。そこから発展し、古墳時代になると本来の意味は失われ、古墳の頂上や周囲に何本もの埴輪が立てられるようになります。そして土砂の流出を避けたり、外観を美しく飾るため、葺石で墳丘の斜面をおおいました(詳しくは3巻を参照)



島根県最古級の埴輪 (塩津山1号墳出土：安来市荒島町)



埴輪と葺石 (古曾志大谷1号墳復元模型：松江古曾志町)

古墳のパーツ...その4 武器

古墳に葬られた王は、生前から先進的な武器をたくさん持ち、ときには武力を見せつけることで民衆を支配したと考えられます。武器の種類としては、矢の先につける「矢じり」や鉄製の「大刀」「剣」「槍」などがあります。



古墳のパーツ...その5 玉飾り

日本人は縄文時代から、装身具として「玉」を用いてきましたが、古墳時代の王も勾玉、管玉といった玉類を好んで使っていたようです。これらは単にアクセサリとしてだけでなく、呪術的な力を持つお守りのようなものとして使われていたと考えられます(詳しくは1巻を参照)。
まがたま 勾玉(右)と管玉 (勾玉・釜代1号墳出土：松江市西浜佐陀町 管玉・造山3号墳出土：安来市荒島町)

